

コンミュニョンの悲劇

—— 中国革命根拠地肅清運動史(VIII) ——

福本 勝清

第四章 鄂豫皖、川陝兩根拠地の肅清

第六節 紅二十五軍の長征と陝北根拠地の肅清

1934年11月、党中央の命を受け、北上抗日第二先遣隊として長征に出発した紅二十五軍⁽¹⁾は、その長征の途中及び終点で二つの肅清事件を引き起こした。

1. 張漢民事件⁽²⁾

長征中の紅二十五軍は34年12月初め、陝西に入り、36年1月下旬、鄂豫陝遊撃根拠地を設立、湖北、河南、陝西三省交界地区から陝西南部にかけて遊撃戦争を展開した。

35年2月、1925年入党以後、楊虎城率いる西北軍で秘密工作を続けていた共産党員張漢民は警備第三旅旅長として部隊を率いて陝南に移動、紅二十五軍に対する迎撃を命じられた。警備第三旅にはその前身である警衛団以来、張漢民が培った党員がすでに200人以上に達しており、張漢民自身いずれ彼の部隊が関中西部に移駐されるのを待つ蜂起し、劉志丹らの陝甘根拠地に接続する新根拠地を開拓する準備をしていたといわれる。

3月中旬⁽³⁾、陝南を転戦中の紅二十五軍は柞水县城を占領した。その時、張漢民旅から使者が到着、相互不可侵を申し込んだ。だが、紅二十五軍指導部の呉煥先(軍政治委員)、戴季英(軍参謀長)はそれを信用せず、使者を査問し、張漢民は共産党員であったが、すでに脱党し、ファシストに加わっている、彼は紅軍を消滅させて楊虎城に功をたて報いようとしている、との供述を得ることに成功する⁽⁴⁾。呉、戴及び徐宝珊(鄂豫

陝省委書記)、徐海東(軍長)を含めた指導部はこの供述をもとに張漢民旅への攻撃を決定した。

すでに使者を派遣し、紅二十五軍とは相互不可侵の協定が成立していると信じていた張漢民は、計画通り紅二十五軍に対する追撃を続行した。4月9日⁽⁵⁾、柞水県九間房で警戒もせず大胆に追走してきた張漢民旅に対し、待ち伏せていた紅二十五軍が襲いかかった。警備第三旅は撃破され、張漢民以下多数が捕虜となった。全く予期せぬ攻撃にあい捕虜となった張漢民など20数人の党員は党員証を示して自分たちが同志であることを証明しようとした。が、戴季英らは信用しなかった。一ヶ月あまり後⁽⁶⁾捕虜の処分が決定された折り、党員と称したものは、全て殺害され、少数の非党員のみが釈放されただけであった⁽⁷⁾。紅二十五軍と張漢民旅の協力のため上海中央局に指示を仰ぐべく西安に赴き、戦闘の翌日、戻ってきた汪鋒(中共陝西省委責任者兼省委軍事委員)は、戦闘の様子を聞き、紅二十五軍の宿营地(藍田県葛牌鎮)に駆け付け、上海中央局の指示を伝え、且つ張漢民らを救い出そうとした。が、彼もまた紅二十五軍に拘留され、その後部隊の北上とともに陝北まで連行され、折りよく陝北に到着した党中央の手によって漸く釈放されている。

この事件は紅四方面軍が西北軍との停戦協定⁽⁸⁾を破って起こした陝南戦役(35年1月～2月)とともに、楊虎城と西北軍の中共に対する不信感を強めさせ、35年冬以後開始された中共と西北軍の統一戦線交渉⁽⁹⁾にマイナスの影響をもたらすことになった。張漢民が中共党員であり、張漢民旅に多数の党員が潜み、活動していたことは、楊虎城には周知の事柄であったからである。逆に、

張漢民を疑いパージを要求していた国民党中央にとっては、この事件は皮肉にも西北軍のなかには共産黨員はいないということを証明した結果となった⁽¹⁰⁾。

〔注〕

- (1) 紅二十五軍3千の部隊のなかには3百人以上の「改組派」など反動組織の被疑者が含まれていた。彼らは同志とは呼ばれず、全くの無権利状態のまま保衛局の監視下に置かれ、勿論自由に話すことも許されていなかった。彼らはつねに着の身着のままのぼろぼろになった衣服をまとい、重い荷物を背負ったり、担架隊員として働いていた。35年冬、徐海東は毛沢東の指示をあおぎ、これら反革命被疑者を解放し、党籍、団籍を回復させたが、この間長く被疑者として扱われ、同じ紅軍にしながら同志として認められていなかったのである。このような構成は夏曦の支配した紅三軍（湘鄂西根拠地）も同様であった。異なるのは、夏曦はこのような被疑者を長期にわたりしかも大量にそのまま処分を保留しておくというような忍耐を持ち合わせていなかったということである。陳志凌「徐海東」『中共党史人物伝』第14巻、48－49。
- (2) 周益三「張漢民同志是怎样犧牲的」，徐文伯「張漢民同志被殺經過」，いずれも『革命史資料』第6輯所収。
- (3) 周益三によれば3月中旬，徐文伯によれば，3月下旬のことである。
- (4) 徐文伯前掲文による。が，周益三，張守憲，李正義「張漢民」（『中共党史人物伝』第21巻）によれば，張漢民らが紅二十五軍に派遣したのは張明遠と馬宗仁であり，彼らは紅二十五軍との間で相互不可侵の協定を結び，連絡信号を打合せて帰り，張漢民に詳しく報告したとある。また，張漢民らはその後も紅二十五軍には陝南，川北の軍用地図などを送り，また医薬品や通信機材を買ひもとめ送る手はずを整えている。

- (5) 周益三等「張漢民」113頁による。徐文伯によれば4月7日，周益三によれば3月19日。
- (6) 周益三等「張漢民」113頁。
- (7) 李雪峰『西安事変史実』，陝西人民出版社，24頁。閻揆要，周益三，雷展如，孟浩「追念張漢民同志」『西安文史資料』第1輯12頁では，殺された者は百人以上にものぼった，と伝えている。
- (8) 1933年6月，紅四方面軍は陝南の西北軍（孫蔚如の三十八軍）との間で相互不可侵の協定を結んだ。それは，両軍間の停戦協定であるとともに，共同の敵，胡宗南部（国民党中央軍）に対抗するものでもあった。この協定が実施されている間，紅四方面軍は，漢中—西安—上海のルートを使い，無線機材，医薬品，電池，地図など貴重な軍事物資の入手に成功する。この秘密連絡網の工作には，中共中央軍委白区残留組織（責任者王世英）の地下黨員たちが当たっている。武志平「回憶在川陝地区的統戰工作」『革命史資料』第3輯，文史資料出版社。
- (9) 35年11月，陝北の党中央は，汪鋒を楊虎城のもとに派遣し，西北軍と紅軍の間の統一戦線樹立を呼びかけた。汪鋒「爭取十七路軍聯合抗日的談判經過」，吳長翼，楊震天，丁福沢編『丹心素裏』，中国文史出版社，1987年。
- (10) 李雪峰前掲書87－88頁。

2. 陝北根拠地の肅清

陝北根拠地（陝甘革命根拠地）⁽¹⁾は1935年当時，党と紅軍に残された最後の革命根拠地であった。1928年春，早くも最初の武装蜂起，渭華（渭南，華県）蜂起を試みた西北地区であったが，その後の武装蜂起と根拠地建設は挫折，失敗の連続であった。華中，華南の革命根拠地の発展から時期的にはかなり遅れ，33年冬以後漸く根拠地の発展期に入り，34年には陝甘辺，陝北の両根拠地，紅二十六軍，二十七軍の主力紅軍を擁するにいたっ

た。35年春以後、紅二十六軍、二十七軍は西北革命軍事委員会（主席謝子長、病死後劉志丹が就任）の統一した指揮を受け、根拠地に対する国民党地方軍閥軍の匪勦戦⁽²⁾を粉碎し、両根拠地が合体、陝甘革命根拠地が成立した。華中や華南の省境地帯と比較しても極めて貧しく後進的であるとはいえ、陝甘辺から陝北にかけて統一されたこの根拠地（人口90数万、面積約30万平方キロ）⁽³⁾は、南方の各根拠地のようにすでにその潜在的な発展可能性を掘り崩してはいなかった。つまり「搾りきったレモン」ではなく、発展の途上にあった。

この発展可能性とは、雑多不純であること、未熟なこと、過度に統制されていないこと、指導部が抑圧的でないことと大いに関係がある。それ故、この陝北の党と紅軍は上部組織である西安の陝西省委（33年7月、国民党に破壊さる）や天津の北方局からは、土匪や民団と区別がつかぬその階級的な不純さやルーズな組織規律が槍だまにあげられ、右翼日和見主義、逃亡主義、武器万能、色濃い土匪的傾向、山岳主義（原文梢山主義）といった批判が投げつけられていた⁽⁴⁾。また土地革命の方法をめぐるのは、富農路線との批判が繰り返されていた。両根拠地にはつねに陝西省委及び北方局から幹部が送りこまれ、当時の極左路線に沿った方針を積極的に推し進めた。

35年7月、北方局より朱理治が陝北に派遣されてきた。続いて9月、上海中央局より派遣された聶洪鈞が陝北に到着した。そして陝南各地を転戦していた紅二十五軍も陝北に到達した。朱理治、聶洪鈞そして紅二十五軍とともに陝北にやってきた程子華を加え、駐陝北中央代表団が成立し、朱理治がその書記に就いた⁽⁵⁾。

朱理治、聶洪鈞は、上海、天津でそれぞれ陝北、陝甘辺両根拠地の右翼日和見主義的傾向や反革命的活動の存在、劉志丹の右翼的思想傾向、反中共活動を続ける張慕陶⁽⁶⁾派の陝北、陝甘辺両根拠地への潜入などをすでにふき込まれていた。彼ら

はソビエト区入りするや郭洪濤（北方局派遣）から報告を受け、それをもとにソビエト区における肅清の実施を決定し、その準備にかかった。まずその手始めとして、7月永坪鎮の西北工委拡大会議の席で、工委書記恵子俊を劉志丹らの傀儡として解任し、以後工作委員会は朱理治が直接指導することにした。彼らは陝甘辺特委と紅二十六軍を指導してきた劉志丹、高崗らが右翼解党主義者であり、且つ右翼反革命分子の庇護者であると断定し、肅清の主要な対象としたのである。

代表団にとって頼もしい援軍こそ、折りよく陝北に到着した紅二十五軍であった。7月中旬、鄂豫陝根拠地の外線に転じた紅二十五軍は、『大公報』紙の記事や地下連絡員の通知により中央紅軍と紅四方面軍の北上を知り、甘肅南部に向かって西進、8月初め甘南に到達した。が、北上部隊の確実な消息がつかめず、一先ず陝北紅軍との合流を目指すことを決定、北上を続け、9月18日、陝北延長県で紅二十六軍、二十七軍と合流した。

同日、発足した駐陝北中央代表団は、西北工作委員会（陝北及び陝甘辺の党の指導機関）を改組し、陝甘晋省委（書記朱理治、副書記郭洪濤）を成立させ、同時に西北軍委も改組、聶洪鈞を主席に任命した。さらに紅二十五軍、二十六軍、二十七軍を紅十五軍団に合同再編し、徐海東を軍団長に、劉志丹を副軍団長兼参謀長に、程子華を政治委員に、高崗を政治部主任に任命した⁽⁷⁾。そのほか馬明方が陝北省ソビエト政府主席に、戴季英が西北保衛局局長に就任した。重要なポストは全て外来幹部が独占し、長期に渡って陝甘辺、陝北両地区で苦闘を続けてきた現地出身幹部は従属的な役割に甘んじるほかはなかった。忘れてならないのは、これで肅清の準備は整ったということである。後は内部に巣食う敵のストーリーを作りあげるだけであった。

9月、陝北入りした聶洪鈞は西北工委の同志たちが、西安や太原からやってきた素性のはっきり

しない者たちの多くは張慕陶がよこした右翼分子であり、またそのなかには西安の国民党特務が含まれていると、常に噂しあっているのを聞いていた。ここでは南方根拠地のAB団、改組派、社会民主党に代わるものとして張慕陶派が登場している。すでに上海中央局では、黄子文、蔡子偉を主要人物とする右派の活動が伝えられていた。その二人こそは張慕陶に直接派遣されて反革命小組をつくり、党とソビエトの名をかたり、党と政府の指導機関を乗っ取り、右翼解党主義の主張と影響を撒き散らしていると中央代表団によって見なされていた。黄子文は劉志丹が関中に派遣した人物であり、蔡子偉も劉志丹が西北工委に派遣してきた人物であった。劉志丹、高崗ら陝甘辺と紅二十六軍の指導者は右翼日和見主義者であり、かつて陝甘辺で紅二十六軍全軍を壊滅させている。劉志丹は過去白軍の旅長であった。張秀山（紅二十六軍第四十二師政治委員、陝甘辺特委書記、西北工委委員を歴任）は劉志丹の縁故者であった、云々と、劉志丹に対する疑いが際限もなく膨らんでいった。

実のところ、33年5月の渭南、華県地区での紅二十六軍の壊滅は陝西省委（書記杜衡）の無謀な南下命令とゲリラ戦術の放棄によるものであった。が、中央代表団にそのような分別、冷静な判断を期待することは無理であった。

9月、王以哲の率いる東北軍4個師が北上、延安を拠点として勦共戦に加わった。東北軍との戦闘を目前にした9月下旬、陝甘辺及び陝北ソビエト区における肅清が始まった。陝甘晋省委会議は肅清方針を確定、まず西安、太原などから派遣されたとされる素性のはっきりしない右翼反革命分子及び地主富農のなかの反革命分子を肅清することにし、同時にソビエト区で破壊活動をしていると噂されている李西萍なる人物と太原から張慕陶が送り込んできた連絡員の逮捕を決定した。この会議に参加していた劉志丹、高崗もこの決定に

同意したと思われる。抵抗すればそれだけ疑われただけであろう。

10月1日、紅十五軍団は延安、甘泉の間で東北軍に対する待ち伏せ攻撃（勞山戦役）を行い、敵1個師を殲滅し、捕虜3700を獲得する大勝利を収めた。その時、すでに後方（省委の置かれた延川県永坪鎮）では「素性のはっきりしない右派分子」とされていた黄子文、張文華、蔡子偉ら数人が逮捕され、逮捕者の口から劉志丹、高崗、楊森（紅十五軍団第七十八師師長）、習仲勲（陝甘辺ソビエト政府主席）、劉景範（劉志丹の弟）など陝甘辺の指導者がすべて右翼日和見主義者であり、大規模な陰謀をめぐらしているとの供述が引き出された。またこの時、朱理治らと意見を異にしていた中央代表張慶孚も叛徒として逮捕されている⁽⁸⁾。

肅清の堰が切られ、大量逮捕が始まった。瓦窖堡で工作していた張秀山、張文舟がまず逮捕され、次いで肅清の手は前線にまで伸び、省委は劉志丹と高崗らを軍とを引き離す策略にでた。後方に戻った劉志丹はただちに白軍の軍官、反革命活動を理由に保衛局の手で逮捕された。続いて、軍事委員会主席聶洪鈞は省委が用意したブラックリストにもとづき、高崗、楊森、習仲勲、劉景範など多数の陝甘辺ソビエト区と紅二十六軍幹部を逮捕した。旧紅二十六軍の営（大隊）級以上の幹部、西北軍委機関の幹部、陝甘辺の県委書記、県ソビエト政府主席以上の幹部のほとんどすべてが逮捕され⁽⁹⁾、拷問にかけられた末、その多くは銃殺、生き埋めにより殺された。旧紅二十七軍関係者⁽¹⁰⁾を含めて、この陝甘革命根拠地における肅清で殺された者は2百人以上にのぼった。そのほかこの時逮捕された者に、馬文端（元陝北特委委員）、張策、張仲良（仲宣県ソビエト政府主席）、楊棋（紅二十七軍八十四師師長）、孔靈甫、朱子休、高錦純（紅軍二十六軍騎兵团政治委員）、趙啓明（同騎兵团幹部）、任浪花（同右）らがいる⁽¹¹⁾。

地方では肅清が最も苛烈に行われたのは陝甘辺

地区及びそこから発展した陝甘辺南区（36年1月以後関中特区と改称）であった。陝甘辺南区では10月、魯笨（元陝北特委委員）が派遣され、肅清を推進、同地区に大きな被害をもたらした。南区労農革命委員会主席張邦英は南区ソビエト政府成立にともないその副主席に転じたが、主席となったのは工作に参加してわずか3ヶ月の雇農秦善秀であった⁽¹²⁾。

南区の北に位置する陝甘辺ソビエト区でも肅清が吹き荒れた。陝甘辺根拠地の中心地、南梁には、10月初め、崔鳳鳴と王徳勝らが派遣され、肅清工作にあたった。武生榮（陝甘辺ソビエト政府財政委員）、張景文（同政府婦女委員）らを含め多数が逮捕され、殺されている⁽¹³⁾。また隴東では杜苑（関中特委責任者の一人）が肅清されている⁽¹⁴⁾。

保安（現在の志丹）県において蜂起した民団部隊の蘆仲林など20数人、高景山、陳宝学など小学校教師5人、地方武装の頭目で反動地主の曹俊章の次子で共産党員の曹成業らは陝甘辺（政府所在地、下寺湾）に派遣されてきた極左路線の推進者によって殺されている。

肅清工作ばかりでなく行き過ぎた土地革命も混乱を引き起こす原因となった。地主、富農を消滅させ、その家族には生きていくことさえできなくさせるといった、南方の革命根拠地で行われた極左的な土地政策を実行した。ついには地主富農ばかりでなく、富農にされた中農まで逃亡し、或いは反動武装の側に逃げ込み今度は逆にソビエト区を襲った。

このような極左路線（肅清）の横行に動揺した部分から敵へ寝返る者も出てきた。保安四区遊撃隊長であった張克儉の家は中農であったが、階級調査の折り、富農に格上げされ且つ肅清の対象となった。張克儉は保安県委書記任文明を殺し遊撃隊を率いて曹俊章が守りを固めている山寨、且八寨に逃げ込んだ⁽¹⁵⁾。

10月19日、毛沢東らが率いる紅軍陝甘支隊約7

千人が陝北に入り、呉旗鎮（呉旗県城）に到着した。22日、毛沢東、周恩来、彭徳懷らは紅軍主力を率いて洛川沿いに南下、下寺湾に着き、陝甘辺特委の龔共逢春から陝甘根拠地での肅清について聞くことになる。ただにち党中央を代表して王首道、劉向三、賈拓夫らが瓦窖堡（10月5日以後ソビエト区の首府）に向かい、保衛局を統制下におき、以後の逮捕を禁じた。獄中であってまだ処刑されていなかった劉志丹など百名以上の革命家たちは幸運にも難を逃れることができたのである。

だが、朱理治、郭洪濤らも簡単には引下がらなかった。42年の再審査で告発されたように、朱理治は逮捕禁止の命令を受けた後でも密かに保衛局にあと4人の逮捕を命じていた⁽¹⁶⁾。戴季英に代わって西北保衛局局長となった王首道⁽¹⁷⁾らの再調査を経て11月初め、拘留されていた者全てが釈放された。この調査報告を受けた党中央党務委員会の審査⁽¹⁸⁾を経て事件が最終的に処理されたわけだが、そこでは肅清された側の主張は取り入れられず、反対に肅清した側の観点がほぼ採用されている。この肅清が陝甘地区の張慕陶反革命派に対するものであること、黄子文、蔡子偉を頭とする張慕陶の指示を受けた反革命小組の存在、党内の右翼日和見主義者と自由主義者がそれらを援助していたなどという理由づけが肯定され、今回の肅清の正当性が承認されている。結局誤っていたのはそのやり方だということになる。

この肅清の責任をとらされたのは実際の肅清工作に関与し、それを指導した戴季英と聶洪鈞であった。11月30日、中央党務委員会の決定により、戴季英には最後警告、聶洪鈞には嚴重警告の処分が下っている⁽¹⁹⁾。朱理治、郭洪濤についてはその後42年10月、陝甘寧党高級幹部会議で高崗に告発されるまで、朱理治は華中局代理書記、陝甘寧銀行行長を、郭洪濤は陝北省委書記、中央山東分局書記などをそれぞれ歴任している。

この陝甘革命根拠地における肅清及び土地革命

政策の誤りによる混乱は地方によっては相当長びいた様子で、混乱時に生じた大衆の寝帰りや反乱が平定されたのは翌36年3月のことであった⁽²⁰⁾。

この時期の肅清は想像されているよりはるかに根深いものであった。これは、長征を経て陝北に到着した党中央と中央紅軍（陝甘支隊）といえども、内部肅清の停止を未だ明確に打ち出していなかったこと、極左路線全体に対する認識がこの時点ではまだ不十分であったことを意味している。張国燾ら紅四方面軍との対立のなかで、紅四方面軍と同じく鄂豫皖地区の出身である紅二十五軍の党中央に対する忠誠を繋ぎとめておかなければならないといったことが、紅二十五軍関係者が深く関与したこの肅清の再審査を難しくさせていたと思われる。

内部に巢食う敵としての反革命集団張慕陶派というイメージは、依然として残っていた。この内部に巢食う敵のイメージこそが肅清を拡大させ、際限のない仲間殺しへ誘う動因であった。このイメージが生き続けるかぎり肅清は息を吹き返す。それは王明、康生帰国後始められたトロツキスト肅清によって再び、現実のものとなる。

〔注〕

- (1) 陝北、陝甘という言葉は、広い意味ではともに陝西、甘肅両省の省境地帯から陝西北部全体を含んで用いられる。狭い意味では延河を境に延河以東、黄河、長城に囲まれた地域を陝北と呼び、延河以西から隴東（六盤山以東の陝西、寧夏両省の間に入り込んだ地帯）にかけての省境地帯を陝甘辺と呼んでいる。一般に陝北ソビエト、陝甘革命根拠地と呼ばれているのは広義の意味においてであり、陝北特委、陝甘辺特委と呼んでいるのは狭義の意味においてである。
- (2) 根拠地に対する囲剿戦は、一般的には34年秋の陝北に対する囲剿戦を第一次、35年5月から7月の陝甘辺、陝北、神府の3根拠地に対する
- 囲剿を第二次、合体した陝甘根拠地に対して西安に西北剿匪総司令部を設け蒋介石自らが総司令となって行った同年秋以後の囲剿を第三次と呼ぶ。趙啓民「陝甘革命根拠地一九三五年兩次反“囲剿”的勝利」『西安文史資料』第3輯。
- (3) 王庭科「紅軍長征大事記」35年7月中旬の項、『紅軍長征研究』。
- (4) 郭洪濤「陝北烽火」『革命史資料』第5輯、53頁。
- (5) この代表団の名称については、「滬局与北局派駐陝北蘇区代表団」、「中央駐陝北代表団」（以上聶洪鈞）、「中央駐北方代表駐西北代表団」（郭洪濤）、「北方局駐西北代表団」（程子華）と各説がある。聶洪鈞「劉志丹同志冤案的產生」『革命史資料』第1輯、郭洪濤前掲文、程子華「我对聶洪鈞同志文章有些与歷史不符的説明」『革命史資料』第3輯。
- (6) 張慕陶（張金刃）及びその政治集団については諸説があるが、なお不明な点が多い。徐彬如「我所知道的張慕陶」『党史研究資料』第4輯。
- (7) 紅十五軍団の中から、後に第七十五師（旧紅二十五軍）師長張紹東、政治委員趙林（凌）波、第七十八師（旧紅二十六軍）政治委員張明先（紅二十五軍より派遣）の3人が後に転向、叛徒になるか或いは脱党している。李赤然「陝北革命根拠地の三次反“囲剿”」『革命回憶録』第5輯。
- (8) 高文『南梁史話』甘肅人民出版社、1984年、148—9頁。
- (9) 李振民、張守憲「劉志丹」『中共党史人物伝』第3巻、218頁。
- (10) 紅八十一師（旧二十七軍）の肅清については李赤然前掲文、130—132頁。
- (11) 李雲峰『西安事変史実』48頁。王英「出使東北軍」『革命史資料』第6輯、88頁。高錦純「春風得意馬蹄疾——記紅二十六軍騎兵団的成長」『崢嶸歲月』、33頁。

- (12) 王英「橋山根拠地の創建、失守と恢復」『西安文史資料』第3輯、36頁。
- (13) 高文前掲書150頁。武敬東、高文、鞏世鋒「陝甘蘇區的紅色堡壘——南梁」『隴東星火』250頁。なお崔鳳鳴は後に党から脱落、王徳勝は叛徒となった。
- (14) 郭洪超「井岡紅旗映亮了隴東高原」『隴東星火』、甘肅人民出版社、1981年、14頁。
- (15) 劉景範「最後一個“土田子”的覆滅」『革命史資料』第6輯。
- (16)(19) 「中央關於一九三五年陝北（包括陝甘辺及陝北）“肅反”問題重新審查的決定」（1942年12月12日）。
- (17) 『中国共産党組織史資料彙編』245頁。
- (18) 注(16)に同じ。郭洪超前掲文では董必武を責任者とする5人の指導小組が問題の処理にあたったと述べている。『中国共産党組織史資料彙編』243頁によれば当時、中央党務委員会書記は李維漢であり、董必武は中央審査委員会の書記であった。
- (20) 劉景範前掲文27頁。

第五章 湘鄂西及び閩浙贛根拠地の肅清

第一節 湘鄂西根拠地 その一

湘鄂西ソビエト区は主要には二つの根拠地からなっている。湖北省鶴峰県（現在の鶴峰土家族自治県）と湖南省桑植県（現在は湘西土家族苗族自治州に属す）を中心とした湘鄂辺地区及び洪湖を中心とした揚子江の湾曲部、洪湖地区である。1928年初め、党中央は周逸群、賀龍を湘鄂西地区に派遣した。彼らはまず、賀龍の故郷である湘鄂辺地区で武装蜂起を計画、地方の英雄であった賀龍の名声と人脈を利用し、農民自衛軍、白軍や会党、民団、土匪などから帰参者を募って赤色武装部隊を作りあげ、同年7月には湘西前敵委員会の下に

労農革命軍第四軍を成立させた⁽¹⁾。それより先の4月、周逸群は湘鄂辺を離れ、洪湖地区に転じた。同地区は経済的には先進地帯に近く、また一般の生活水準や文化水準も湘鄂辺より高く、大革命期以来の党の基盤が残っていた⁽²⁾。周逸群は鄂西特委を中心として農漁民を遊撃隊に組織し、河川沼沢を利用してゲリラ戦を展開、中国で初めての平原区における根拠地建設に成功する。1930年2月には鄂西紅軍は紅六軍に成長、5月には鄂西ソビエト五県連県政府が成立、発展期に入った。

洪湖地区でも目立っていた党内の地方セクショナリズムは湘鄂辺でも強く、また賀龍の紅四軍は湘鄂辺の強力な豪紳地主階級の力を背景とする地方軍閥、反動的な地方武装勢力、民団、挨戸団、会党、土着武装との戦闘に明け暮れ、その下部成員を吸収改編して紅軍兵士に当てては、盛衰を繰り返していた。そのようななかでは、軍であれ、地方党部であれ、鍛え抜かれた党及び軍を建設することは不可能に近く、土地革命を推進するソビエト運動を指導することは勿論のこと、30年初めには5千人以上に増えた紅四軍兵士に対する指導力も十分に発揮できずにいた。

1929年から30年にかけて、党中央は湘鄂西紅軍の指導力強化のために、許光達、王一鳴、王鶴、周栄光、周小康、柳克明（直荀）、孫徳清（一中）、曠継勲などを根拠地に送り込んだ。これは間違いなく湘鄂西地区の紅軍の指導力を増した反面、党中央で頭を持ちあげ始めた李立三を代表とする極左冒険主義路線の観点や方針を湘鄂西根拠地に直接にもたらすことになった⁽³⁾。ただ、この中央より派遣されてくる指導者たちが根拠地にもたらした功罪については、どの地域であれ同じような傾向をもっており、湘鄂西地区だけの問題ではない。

1930年7月下旬から8月上旬の鄂西特委第三次代表大会では、中央巡視員柳克明（後に長江局特派員）、鄂西特委書記周小康らと周逸群、賀龍が、

7月に成立した紅二軍団の行動方針と洪湖ソビエト区の発展方向をめぐる激論を闘わせた。結局、前者の主張する紅二軍団を西進させ、まず沙市を攻略、次には武漢に向け進撃するという、李立三路線に沿った行動方針が決まった。7月、湖北公安県で、湘鄂辺の紅二軍（紅四軍を改称）と洪湖地区の紅六軍の合同により編成された紅二軍団は、9月初め洪湖地区を出発、総指揮賀龍、総政治委員周逸群、1万余の兵力であった。

だが、沙市では強固な防御陣に阻まれ、1千人以上の死傷者をだして撤退した。しかし、鄂西特委及び柳克明は、湖北省総行動委員会の指示に従い武漢進撃を準備するよう主張したため、紅二軍団は今度は東に向けて兵を進めた。折しもこの時、洪湖地区でソビエト政権に対する白極会⁽⁴⁾の反乱が勃発、また赤区と白区大衆の間の鋭い対立から、敵のソビエト区への経済封鎖が効き目を発揮し、ソビエト軍民は大きな苦しみを受けた。紅二軍団の最も切迫した任務は白極会を鎮圧しソビエト区内にある「白点」を消滅させることであるという周逸群、賀龍らの主張が説得力を得、彼らは紅二軍団の軍事行動に対して、再び主導権を掌握した。9月中には白極会鎮圧に成功し、監利県城など少数の城鎮を除き、ソビエト区内の敵の拠点を攻略し、洪湖根拠地の基礎を固めた。

次に党中央を代表して湘鄂西に登場したのは鄧中夏である。建党期以来の著名な革命家の一人であり、理論的指導者であった鄧中夏は、大革命敗北後、駐コミンテルン代表部の一員としてモスクワにあり、30年7月に帰国したばかりであった。9月2日、洪湖ソビエト区に到着した鄧中夏は中央の指示に基づき、鄂西特委を湘鄂西特委に改組、自らその書記となり、軍事委員会書記をも兼任した。また紅二軍団政治委員として軍とともに行動し、直接軍事作戦を指導した。周逸群は特委代理書記及び湘鄂西ソビエト連累政府主席として地方工作にあたることになる。30年9月20日の紅二軍

団前敵委員会拡大会議から31年9月28日の紅三軍前委拡大会議における前委書記解任までの一年間、湘鄂西紅軍を指導した鄧中夏の基本的な理念と政策は李立三路線と同一であり、その主張は中心都市を奪取してプロレタリアートの指導する都市ソビエトを樹立し、中国ソビエト運動に新紀元をもたらすことであった。だが、その理念や主張は李立三路線とのつながりよりも、むしろ彼自身のマルクス主義理論家として培った革命観によるものである。そして、彼が執拗に紅軍の遠征や都市攻撃を命じた背景には、中国共産党の有数の指導者として、自ら指導する湘鄂西地区を中央ソビエト区に匹敵する大根拠地に発展させることによって、忘れかけられている中国党内での自分の存在を再び確かなものにしたいという彼の個人的な欲求があったと思われる⁽⁵⁾。

このような鄧中夏の指導が現地の党、軍指導者の強い反発を招くのは当然であった。同年10月からの渡江（揚子江）南征で早くも対立は顕在化し、紅軍主力を集中し長駆遠征して中心都市の攻撃を主張する鄧中夏とソビエト区を固めながら外へ向かっての発展を主張する周逸群、賀龍、段徳昌（紅六軍軍長）、万濤（湘鄂西特委委員）らとの間の分岐は決定的となった。最初に周逸群を軍務からはずした鄧中夏はその後、南征途中には段徳昌も洪湖地区に帰すなどして紅二軍団の掌握につとめた。だが、常德、長沙を目指した南征も、澧州、津市（湖南）で頓き、洪湖地区に戻る自信を失い、湖南湖北の省境に沿い移動、五峰（湖北）を経て湘鄂辺根拠地に到達した。その間、指揮に果敢さが欠けたため、敵の鉄打ち遭ったり、紅軍に参加したばかりの土着武装部隊⁽⁶⁾が寝返ったりなどして、紅軍は大きな損失を被った。

12月下旬、鶴峰に至った紅二軍団は共産軍を自称していた四川東部の土着武装集団甘占元、覃伯卿、張軒など各部総勢3千を改編し紅軍に吸収した。同時にその頭目9人を処刑している⁽⁷⁾。だ

が、その後、鶴峰、五峰を中心に石門（湖南）、長陽、建始（湖北）一帯を流動している間に部隊が激減、新ソビエト区を実現させることはできなかった。紅二軍団が出発した直後、鶴峰走馬坪で暗殺未遂事件が起きた。革命の隊伍に紛れこんでいた「反革命分子」が同志を暗殺しようとして失敗、数人が逮捕され、取り調べの後、処刑されている⁽⁸⁾。このような紅軍内での寝返り（反水）や白軍への投降への手土産に同志の寝首をかくといったことは、軍閥軍、哥老会、神兵⁽⁹⁾、民団、土匪の類を改編吸収して部隊を作りあげてきた賀龍軍にとっては、謂わば起こっても不思議のない出来事であり、従来ならばそれほど内部に深刻な影響を残さなかったであろう。だが、30年前後から党内では極左的な風潮が勢いを増し、党軍内に吸収されていた多数の旧社会の母斑をつけた同志に対する不寛容が強まり、性急で苛酷な処理が当然視されるようになっていた。

このような背景の下で、湘鄂西地区における最初の粛清が行われた。この粛清を推進したのは当時湘鄂辺党部の責任者周小康である⁽¹⁰⁾。また紅二軍団前敵委員会（書記鄧中夏）もその粛清に承認を与え、誰を処刑するかについて周小康を支持していた点において同様の責任を負っている。この粛清の結果、賀龍の湘西拳兵以後、紅軍に協力し、物資、弾薬などを供給したり、遊撃隊の活動を担っていた地方武装の首領谷德桃（谷大姐）が殺された。賀龍の妻蹇先任（当時）の回想によれば、谷が「謀叛通敵」を疑われたのは、同じく地方武装を率いて紅軍に身を投じていた賀佩卿（賀龍の旧部）などの誣告によるものとされている⁽¹¹⁾。だが、粛清された陳連振（紅軍第五路指揮）、谷德桃と同じく賀佩卿もその嫌疑を受けていたはずである。事実32年6月には賀佩卿らは湘鄂辺特委書記周小康に対して、迫られて反乱を起こしている。賀佩卿らがもし谷德桃を誣告したとしたら、それは周小康ら地方党部の圧力や誘導によって筋

書がつくられた可能性が強いと考えるのが、粛清を読む際の最も妥当な推論であろう。

31年3月、洪湖地区に夏曦を書記とする湘鄂西中央分局が成立、紅二軍団に対し洪湖地区に戻るよう指示した。また兵員を大幅に減らした紅二軍団を紅三軍に縮編し、前敵委員会を取り消し、鄧中夏を各職務から解任、軍長賀龍、政治委員代理に唐赤英を任命した。だが、唐赤英の到着を待たず、紅三軍は鄧中夏の主張を入れ、揚子江を北に渡り、襄河（漢水）と揚子江の間の、荊門、当陽、遠安一帯に新ソビエトを樹立し、洪湖地区に対する国民党軍の包囲を打破する作戦に出た。4月初め、長江を渡り巴東に出、巴（東）興（山）秭（帰）ソビエト区を経て東進し、4月中旬、荊門、遠安を攻略。だが、当陽を抜けず、大きな損失を出して退却。が、荊山山地の南、馬良坪で包囲され更に北へ退却。計画を変更し、武当山地一帯の房県、均県を中心とした鄂西北根拠地を建設し土地革命を推進した。

賀龍は、紅三軍政治委員鄧中夏はここでも何の変化もなく、「地方において、粛清闘争でも誤って何人かを殺し、地方の工作を大いに弱めてしまった。土豪打倒や食料の調達では中農の利益を犯し、白きくらげを作っている貧農の利益までも損なってしまった」⁽¹²⁾と述べ、鄧中夏を批判している。賀龍の言う房県での粛清闘争とは恐らくは革命政権樹立に伴う反動派鎮圧のことであろう。10月、紅三軍主力は一年ぶりに洪湖根拠地に戻った。全ての職務を解かれた鄧中夏は夏曦を筆頭とする湘鄂西省委の批判を浴び、上海に召喚され、そこで再び党中央のセクト的な批判に晒されることになる。

紅二軍団（紅三軍）の一年に及ぶ流動の間、洪湖根拠地では主力軍の不在に苦しみながらも、周逸群、万壽ら湘鄂西特委は30年冬から31年前半にかけての国民党の匪剿戦に対峙した。彼らは当初わずかに数百の赤色地方武装を糾合して新六軍を編

成、江北と江南に指揮部を設け、段徳昌、段玉林が指揮して夜襲や沼沢地帯の特徴を利用してゲリラ戦を展開、軍民挙げての総力戦によって漸く第一次、第二次の囲剿戦からソビエト区を守ることができた。31年5月、洞庭湖北岸地域の工作からの帰途、周逸群は敵の襲撃に遭い死亡する。

紅三軍の洪湖地区への帰還と鄧中夏の失脚後、新たな対立が踵を接してやってきた。中央代表夏曦と前湘鄂西指導部の対立である。31年3月下旬、四中全会以後の新中央の代表として湘鄂西ソビエト区に派遣されてきた夏曦は、中央分局を組織し自らその書記となったが、他のソビエト区に派遣された中央代表と同じく「欽差大臣」として大権を振るった。当初、分局の成員は夏曦、賀龍、徐錫根、関向応であった。徐錫根は31年夏に赴任したがその後上海に戻り、間もなく国民党に逮捕され、国民党の特務になっている。関向応は32年1月、湘鄂西ソ区に到着している。

夏曦の到着後、組織の再編、指導部の交替が行われ、6月には湘鄂西臨時省委、共青团湘鄂西省委、省総工会、省ソビエト政府が従来の組織を拡大して設立された。その他のソビエト区と同様に、夏曦は従来の周逸群ら湘鄂西党指導部がとってきた路線を富農路線と呼んで、その成果を全面的に否定し、右翼日和見主義路線が湘鄂西における主要な危険性であり、湘鄂西の党、軍、ソビエトの工作をコミンテルン路線と四中全会の正確な路線に沿って転換させなければならないと宣言した。

だが、7月には長江の大水害により洪湖ソビエト区の人口の70パーセントがソビエト区の外に避難し、加えて8月以後、国民党による第三次囲剿戦が始まり、その対応に迫られ、従来の湘鄂西ソ区の工作方法を夏曦の望むように全面的に転換する暇はなかった。第三次反囲剿戦は被災民つまり赤区白区の大衆を動員し、少数の紅軍、赤色地方武装の活躍により辛うじて撃退することができた。

だが、秋以後、比較的安定した局面がソビエト

区に戻ってくるにつれて、夏曦の独断専行が再び露骨になると同時に、それを不満とする万濤など従来より周逸群の指導の下に洪湖根拠地の指導にあたっていたリーダーたちの間の亀裂が深まり、ついに幾つかの問題をめぐる激論を闘わせる状態となった。問題の第一は、紅三軍九師の北上と江南ソビエト区喪失の責任をめぐる問題であった。8月、湘鄂西省委と軍事委員会は万濤に紅九師（新六軍を改称）を率いて北上し、国民党軍の根拠地包囲を打破するとともに洪湖地区を離れること一年近くになる紅三軍を迎えるように命じた。万濤らは潜江、荊門らを攻略し、敵の第三次囲剿戦を失敗に終わらせ、9月末には荊門において南下してきた紅三軍と合流、使命を終えて洪湖地区に帰還した。だが、同時期、長江南岸（洞庭湖北岸）の華容などのソビエト区が長江の水かさが余りにも増し、江を横切って兵を送ることが難しく有効な支援ができないうちに、敵の包囲の後、占領されたしまった。党中央より江南ソビエト区の喪失の責を問われた夏曦は、それを全て万濤と紅九師北上を指揮した段徳昌（師長）、陳培蔭（政治委員）らに帰し、紅三軍前敵委員会から万濤を排除すると同時に、紅三軍政治委員の職務からも万濤を解任、且つ紅三軍の軍部及び各師を解散し、軍幹部全員を降格しようとして、それを不満とする万濤らと夏曦の対立は決定的となった。

第二の論争は紅三軍の作戦方向をめぐる発生した。紅三軍主力は帰還後、襄河北岸に出撃したが、潜江が再度敵に奪われたため紅三軍はそのまま襄北地区から京漢鉄路方向に向けて作戦行動をとるのか、包囲を破って洪湖地区に戻りソビエト区を固めた後、江南ソビエト区の回復を目指すのかで意見が分かれた。紅三軍政治委員として部隊を率いていた夏曦は、北進を主張して軍指導部と対立、結局唐赤英（軍委参謀長）を後方に派遣し、湘鄂西省委の同意を求めた。

だが、11月20日に開催された省委拡大会議では

夏曦不在のためもあるが、夏曦の指導に対する批判が続出し、襄北への発展を主張することは洪湖ソビエト区を放棄する左翼逃亡主義だと批判する万壽の意見に支持が集まった。もとはと言えば、この襄北地区への発展は段徳昌の主張であった。その目的は水害に苦しんでいる洪湖ソビエト区にとり、紅三軍全体に食糧その他を供給することは難しく、新ソビエト区を開拓して紅三軍の補給問題を解決し、洪湖ソビエト区の負担を軽減し、敵の軍事的圧力を分散させ、再度発展の条件を整えるというものであった。だが、それを引き継いだ夏曦の狙いは、襄北地区から鄂北ソビエト区（襄樊、棗陽、宜城地区）及び鄂豫皖ソビエト区を結ぶ武漢包囲体制を実現させることであった。この夏曦不在で行われ、夏曦批判を表面化させた湘鄂西省委拡大会議は、万壽、潘家辰（省委巡視員）⁽¹³⁾の「反中央分局のセクト活動」と見なされ、後の夏曦の粛清運動に大いに利用されることになる。

この間、夏曦により批判を受け処分された万壽は、直接党中央に訴え採可を仰いだ。また夏曦、万壽らの対立と争論に窮した省委も宋盤銘（分局及び省委委員）を中央に派遣し指示を請うた。12月中旬、宋が上海より戻り中央の指示を伝えた。中央は紅三軍各師の廃止については同意しなかったものの、全体として夏曦を強く支持し、湘鄂西中央分局は成立以来正しい路線を歩んでいると評価した。万壽らはなおも納得せず、尉示筠（省委委員）を派遣して再度中央に自分たちの意見を反映させることにした。

両者の対立は1932年1月の湘鄂西省委第四次代表大会で最後の局面を迎える。大会の前半では、夏曦の政治報告を受け、万壽、潘家辰を先頭として各代表たちが、土地再分配のなかで中農の利益を犯していることについて、地主の抹殺、富農の駆逐について、江南ソビエト区喪失、紅三軍の改編と幹部の処分、洪湖水害の際に傷病者や地方幹

部を分散させ帰郷させたことなどについて、批判が続出し、夏曦は全くの孤立状態に陥った。だが、会議の途中、皮肉にも反夏曦派が中央に送った尉示筠が関向応を伴って湘鄂西に戻った。尉示筠は従来の立場を変え、夏曦の弁護に回り、逆に万壽、潘家辰などを非難し、次いで関向応が万壽らの夏曦批判は反コミンテルン、反中央であると決めつけたところで会議の様相は一変した。中央が以前にもまして夏曦を支持していることが明らかになった以上、万壽、潘家辰ら反夏曦派に勝ち目はなく、省委の各指導者、楊光華（省委書記）、崔琪（ソビエト政府主席）、彭之玉（省委委員）らは夏曦支持を表明、大部分の代表たちは中央の決定の前に沈黙するか、万壽、潘家辰らへの批判に唱和するしかなかった。大会は夏曦の政治報告を受入れ、万壽、潘家辰らは李立三主義者であり、鄧中夏の信徒と非難して終わった。党中央の決定の前には多数の意見や批判などは無力であった。反夏曦闘争のこのような惨めな結末は、以後の夏曦の粛清への踏み出しを決定的なものにした。

1932年初め、張国燾の鄂豫皖ソビエト区における大粛清に関する情報が湘鄂西にも伝えられ、「粛清をして匪剿戦に勝利できた」という鄂豫皖での経験が誤りのない教訓として全面的に夏曦によって取り入れられることになる。粛清の名のもとに異論を持つ同志や個人的な確執を有する同志を排除することは、既に当時は党内の風潮となっていたが、同志からの批判や周囲からの孤立に悩まされていた夏曦にとり、この粛清という新しい党内矛盾の解決方法は彼の望み通りのものであったろう。夏曦ら中央分局はまず改組派、第三党などに対する警戒を強め、その反革命活動を鎮圧するように呼び掛け、ソビエト区内の粛清に向けた世論を培養するとともに、31年11月から32年1月までの湘鄂西党内の反夏曦闘争に参加した黨員たちへの攻撃を強め、それがあたかも反革命派の陰謀と何らかの関係があるかのように匂わせていっ

た。

湘鄂西ソビエト区には多数の反革命派が隠れ潜んでいると思い込んでいた夏曦は、省政治保衛局を改組し、その局長、科長に肅清工作を断固として実行する自己の信任の厚い幹部を任命、肅反委員会と革命軍事法廷を彼の直接の統制下においた。当然この各級保衛局、肅反委員会、革命軍事法廷は独立した指揮系統を作っており、各級党部の干渉を許さず、ただ中央分局書記もしくは極少数の責任者の決定にのみ従うようにされていた。これらの肅清機構を用い、夏曦は計画的に順序立てて肅清工作を推進していくことができた。32年5月、ついに湘鄂西ソビエト区における肅清の突破口が開かれた。

〔注〕

- (1) 北伐当時、張發奎麾下の国民革命軍第四軍は広東軍（粵軍）の最強部隊として勇猛をもって知られ、その最精鋭部隊である葉挺独立団（連隊）は特に鉄軍と称せられた。第四軍には共産党員が多く、その主力であったことから、中国共産党が1927年国共分裂以後、武装闘争に踏み切った後も、幾つもの紅軍部隊が第四軍を自称した。第二次国共合作成立後、葉挺を軍長に、南方の遊撃隊を集めて作った部隊に新編第四軍と名付けたのも同じ理由からである。
- (2) 矢野龍渓は周逸群が洪湖地区に転じた理由として、賀龍の紅軍の組織方法が余りにも旧式で、党の軍隊にふさわしくないと周逸群が批判したためであろうと見ている、矢野龍渓『中国紅軍史』河出書房、1979年、89頁。
- (3) 梁琴、姜之錚、陶凱、古堡『湘鄂西蘇区歴史簡編』1982年、89頁。なお、湘鄂西根拠地の概略については本書によっている。
- (4) 白極会とは『湘鄂西蘇区歴史簡編』99頁の注によれば、監利、沔陽、天門、潜江一帯の豪紳地主が迷信を利用して反革命活動を行っていた武装集団。
- (5) 賀龍は鄧中夏が「第二の中央ソビエト区」建設を目指していたと述べ、賀龍の妻（当時）蹇先任は「東固のような根拠地」をつくりあげようとしていたと回想している。賀龍「回憶紅二軍団」『近代史研究』1981年第1期13頁。蹇先任「桑鶴歲月」『革命回憶錄』第4輯、25頁。
- (6) 原文は「土著武装」。『湘鄂西蘇区歴史簡編』112頁、蹇先任前掲文18頁注1。
- (7)(8)(11) 蹇先任前掲文、28～32、39、40頁。
- (9) 『湘鄂西蘇区歴史簡編』27頁の注には、「神兵は清朝以来鄂西及び湘鄂川黔境界地区に出現した一種の迷信の色彩を帯びた地方武装集団である。そのなかには『大刀会』、『双刀会』、『聯英会』などの区別があった。神兵の社会成分は複雑で、その大衆の多くは勤労大衆に属し、上層は地回り、遊民、豪紳のボスが多かった」とある。賀龍前掲文8頁注では、28年賀龍挙兵以前には、党地方組織の指導者のなかにも神兵の首領に鞍替えするものがいたと記されている。
- (10) 蹇先任は周小康を湘鄂辺特委書記としているが、湘鄂辺特委が設立されたのは31年4月である。蹇先任前掲文40頁。
- (12) 賀龍前掲文、16頁。
- (13) 賀龍前掲文の編者注では、潘家詢は中央巡視員及び湘鄂西省軍分会委員。

第二節 湘鄂西根拠地 その二

1932年5月、中央分局と軍事委員会が周老嘴の拡大会議で肅清の開始を決めたちょうどその頃起こった二つの偶発的な事件が、はからずも湘鄂西における大肅清の引き金となった。一つは紅三軍軍部が湖北省潜江县吳堰嶺に駐留していた時、紅八師特務隊長が規律を犯し、農民の鶏と牛を殺して食べた事件である。中央代表はその隊長を捕らえ、拷問にかけて彼が改組派であると自供させることに成功した⁽¹⁾。数日後、第二の事件が起き

た。襄北ソビエト区天漢県⁽²⁾で国民党の軍官が逮捕されたのである。スパイとして取り調べたところ、張錫侯というその男は自分が「統一国民党」のメンバーであり、ソビエト区天漢県軍事部楊国茂と結託し、5月18日に紅軍と遊撃隊のなかで暴動を起こすことを企らんでいたと自供した⁽³⁾。夏曦はこの供述を信用し、翌日紅八師参謀長胡慎己、紅三軍補充団団長羅漢などを逮捕、厳しい拷問から自供を引き出し、さらに一群の改組派を捕まえていった。肅清運動は地方では監利、沔陽両県の反革命首領と組織の摘発から、省ソビエト機関内の反革命分子に及び、軍内では紅軍各師から紅軍学校、レーニン学校に及んだ。続いて江陵、江南へそして各県に広がった。逮捕者が続出し、ついにはソビエト区全体と党、軍、ソビエト機関から様々な反革命分子が狩りだされるに至る。

湘鄂西省委、省ソビエト執行委員、省ソビエト政府部長クラス以上の幹部で反革命の烙印を捺されたものが、計23人、機関職員では4、50人にのぼった。党学校び学生は半数が反革命分子とされた。地方党部では宜陽特委（白区）と湘鄂辺特委、江陵、沔陽、川陽（漢川、漢陽）3県の党常務委員会は全て皆改組派により乗っ取られていると見なされ、3県の党委員会は偽共産党として解散させられている。江南（長江以南、洞庭湖北岸）県委は書記1人を除いて全員が改組派とされ、襄北特委、荊門、潛江、天潛（天門、潛江）、天漢、雲孝（雲夢、孝感）各県の党組織には全て改組派が潜り込んでおり、監利県委のみが純粹であるとされた。また紅軍では、一番新しく編成された紅八師（師長段玉林）がまず最初に疑われた。恐らくその前身の一つが漢川独立団であり、肅清の突破口になった天漢県の紅軍、遊撃隊とも近い関係にあったためであろう。紅三軍では夏曦は団（連隊）以上の指揮者28人を重要な反革命分子と断定したほか、軍事委員会直属機関でも23名が反革命とされた⁽⁴⁾。そればかりではなく、紅三軍

では營（大隊）長クラスにも被疑者がでたほか、後方の軍事部門から病院長、各県軍事部長、遊撃隊長の多くが、また少数であるが連（中隊）長、排（小隊）長、政治指導員に至るまで改組派など反革命分子として逮捕されている⁽⁵⁾。

その後の四次にわたる夏曦の肅清を通じて、紅三軍の連以上の幹部の90パーセント以上、湘鄂西ソ区の区、県、省級幹部の80パーセント以上が改組派とされてしまった⁽⁶⁾。最も奇怪なのは、一年前に既に殉死している周逸群までもが湘鄂西地区改組派の最高指導者とされ、ソビエト区を国民党に売り渡そうとしていたと中央に報告していることである。彼の殉死は陰謀であって、彼はまだ生きていて国民党のソ区侵攻のために画策しているとまで、夏曦は疑っていたようである⁽⁷⁾。

32年5月から10月の洪湖ソビエト区の喪失まで、夏曦の肅清は続けられた。至るところに監獄が造られ、ソビエト区の首府瞿家灣（監利県、現在洪湖県に属す）の周囲では祠堂や廟宇を利用して監獄が8、9ヶ所設けられ、改組派、反革命分子を収容した。肅清の開始とともに、夏曦をトップとする肅反委員会が作られ、これが肅清工作の最高決定機関となった。紅軍とソ区各級機関では政治保衛局が改めて整頓され、夏曦らの一言で誰もが逮捕され、処刑されるのを免れなかった。肅清は当然のごとく厳しい拷問によって行われた。反革命だと自白しなければ火で足を焼いたり、竹べらを指と爪の間に刺しこんだり、女性の場合は乳首を刺した。保衛局副局長であった彭国材などは自分を反革命とは絶対に認めなかったために、ついには麻袋に入れられ、洪湖に投げ込まれて溺れ死んでいる⁽⁸⁾。このような尋問からはどのような陰謀も誘導可能である。兵器廠から摘発された反革命分子は、彼らが造った弾薬が暴発して銃器を壊すように仕組んでいたとされ、第四医院院長張典武は数日で治る傷兵の腕や足をわざと切りとり、不具にしていると誣告されている⁽⁹⁾。

肅清された幹部は、大きく三つに分けられる。第一は湘鄂西根拠地の創立に携わった革命家たち、第二はソ連留学組と黄埔軍官学校出身者、第三はかつて白軍にいたことがある者もしくは党から派遣されて国民党軍隊のなかで工作した経験がある者である⁽¹⁰⁾。これらの分類に属さない人々とは、その大部分が湘鄂西ソビエト樹立の後に党員や幹部になった者、つまり経験の浅い現地出身の労農幹部である。彼らのみが、夏曦の肅清の対象にならずにすんだのである。

この夏曦の第一次肅清で殺害された革命家たちの名を以下に記す。湘鄂西省委常務委員万濤，湘鄂辺特委書記周小康，中央分局巡視員尉示筠，宜昌特委書記張宗理，省ソビエト労農監察委副主席侯蔚文，省ソビエト副主席劉革非，省ソビエト政府党団（フラクシオン）書記彭之玉，省委巡視員潘家辰，湘鄂西総工会党団書記張昆弟，省ソビエト政府財政部長・湘鄂西銀行行長戴補天（天補）⁽¹¹⁾，省政治保衛局副局長彭国材，省ソビエト政府経済部長許栩，省委機関誌「ボルシェビキ」編集者徐彬，「紅旗日報」編集者毛簡青⁽¹²⁾，第四医院院長張典武，紅三軍参謀長孫德清，湯慕禹，軍政治部主任柳克明（直荀），紅七師政治委員李劍如，王鶴，李昆明，参謀長趙奇（森）⁽¹³⁾，周榮光（容克）⁽¹⁴⁾，紅八師師長段玉林，政治委員傅光夏，参謀長胡慎己，政治部主任戴君実，周子服（夫），紅九師政治委員孫子濤，参謀長張応南，胡梯，政治部主任劉鳴先（九）⁽¹⁵⁾，呉鳳卿，紅十九団団長陳化山，参謀長向陽勝，羅漢厚，紅二十二団団長賈鳴鐘，王茂甲，紅二十三団団長黄国洲，紅二十四団団長呉玉堂，紅二十六団団長陳光明，紅二十七団団長楊嘉瑞（処刑時に逃亡），紅三軍補充団団長羅漢，鄂西北独立団団長姜万善，湘鄂西警衛団団長羅統一，元紅二軍第四師政治委員陳協平，元湘鄂辺独立師参謀長董朗，元紅四軍経済委員会委員長李良耀など。

些か付け加えれば，張昆弟は長沙第一師範に在

学時，蔡和森，毛沢東らとともに新民学会を設立した仲間であり，夏曦はその新民学会の最も若い世代に属していた。柳直荀も毛沢東の友人であり，1957年に毛沢東が作った詞『蝶恋花・李淑一に答う』でその名が知られている⁽¹⁶⁾。李劍如はソ連留学組であるが，モスクワでは余篤山（鄂豫皖）などとともに反王明派のリーダーであった。夏曦支持者もまた死を免れなかった。尉示筠は32年4月，中央分局巡視員として鄂北ソビエト区に赴いたが，そこで極左路線を貫徹し，従来の幹部を排斥。軍事上では冒険主義を推進し，守りの堅い敵の拠点を攻撃して部隊を消耗させ，且つ敵の攻撃に対しては単純防御に出る一方，根拠地の党，軍，政府の幹部を多数肅清したため，6月上旬には鄂北ソビエトは崩壊した。洪湖地区に逃げ延びてきた尉示筠は夏曦の手により反革命として殺害されている⁽¹⁷⁾。紅三軍参謀長孫德清（黄埔軍官学校出身）も賀龍の回想では，夏曦の支持者であった⁽¹⁸⁾。

湘鄂辺特委書記周小康も湘鄂辺地区において積極的に夏曦路線を推進していた。6月以後の敵の攻撃に対しては「寸土も敵に蹂躪させず」との軍事方針で，優勢な敵に対して無理な戦いを挑んでは失敗している。6月下旬，桑鶴（桑植，鶴峰）遊撃梯隊の責任者賀佩卿，王湘泉，賀炳南が湘鄂辺特委に対して反乱を起こし，桑植県委書記楊英など20余人の幹部を殺害する事件が発生した。蹇先任によれば賀炳南らは「反特委」，「反共不反賀（共産党には反対だが賀龍には反対しない）」を叫び，「特委が我々を殺そうとしたから，我々が周小康を殺しに来た」，「江北の奴らを皆殺しにしろ」と言っていたという⁽¹⁹⁾。「江北人」（江北佬）とは周小康など洪湖根拠地から派遣されてきた人々を指している。鄂北ソビエト区で尉示筠が夏曦の路線を忠実に執行したように，周小康も湘鄂辺に極左路線を持ち込み，部隊を改造すると称して賀佩卿，賀炳南といった賀龍の旧部を

肅清しようとして、逆に先手を打たれたと考えられる。また、賀龍がその回想で述べているように、彼らが反乱を起こした後も、白軍と戦い、賀炳南は敵に包囲されて自殺、賀佩卿、王湘泉は後に中央分局の召喚に応じ処刑されている⁽²⁰⁾。

この事件は富田事件、黄安五区（鄂豫皖）の反乱と同様な、肅清に対する反乱であった。反乱に直面した周小康は勦共軍と反乱軍に銃撃された形となった。9月、湘鄂辺特委機関及び湘鄂辺独立団とともに包囲を突破し崩壊寸前の洪湖ソビエト区に辿りついたが、独立師参謀長董朗ら多数とともに、夏曦により反革命と断定され肅清されている⁽²¹⁾。

賀龍は夏曦の第一次肅清について、「洪湖の県、区の幹部を肅清の中で殺し尽くした。紅三軍の中には、相次いで十数人の連長を殺された連がある。夏曦は洪湖で数ヶ月殺し続け、この肅清だけで1万人以上を殺害した」⁽²²⁾と述べ、洪湖では今（1961年、62年）でも、あちらこちらからたくさんの白骨が堀りだされていると述べている。34年の二度の中央への報告の中の数字から割りだせば、第一次肅清で逮捕した人数は2千4百名前後となり、賀龍の1万人以上の処刑という数字とは大きな隔たりがある⁽²³⁾。

反革命分子として摘発されたのは改組派ばかりではなく、第三党、トロツキスト、陳独秀派、A B団といった党外の政治セクトから、羅章竜派、瞿秋白主義者といった党内の異分子の名が挙げられていた。そのほか、改組派の別組織として、様々な名称の荒唐無稽な組織が登場する。「何人かの妻がおしゃれずきならば忘八委員会をつくり、嫁を探したがっているものは恋愛研究会をつくり、ものを食べるのが好きなやつは鬭争委員会や災民団をつくる——（この種の組織が最も広がりがある。ものを食べたるのに参加したがっているものが多いからである）。このほか蓮華会、野良猫会など様々な環境と面白いものを利用して、面白い

組織をつくりだすが、ただはっきりした組織はない」といった夏曦の言説は、彼がとくに現実との接触を失った境地に達していることを示している。そのほか、兄弟団、喫茶会、并臂（腕を合わせる）会、扇子会、麻花会といった組織のメンバーが捕まっている⁽²⁴⁾が、これらは全て拷問から生まれた幻の集団である。

湘鄂西ソビエト区の肅清は、鄂豫皖地区の肅清とは違い、夏曦の肅清が直ちに洪湖ソビエトの死命を決した。32年7月中旬に始まった国民党の洪湖地区に対する第四次囲剿は、国民党湖北省政府主席何成浚を左路軍司令官に据え、過去に三倍する十万の兵を集め開始された。それに対し夏曦ら中央分局は、当初は食糧調達を目的として守りの堅い沙市、江陵、草市の占領を目指し、紅三軍第七師、八師に攻撃を命じた。が、攻撃は大きな損失を出して中止される。じりじりと包囲の輪を縮めてくる敵に対して、賀龍ら紅三軍軍部は外線での運動戦を唱えたが、それらの意見を抑え、夏曦は「二つのげんこつで撃つ」作戦を採り、兵を二つに分け、半分は陣地戦で洪湖ソビエト区を守り、後半分は襄北に出て敵を牽制することにした。だが、敵の重圧の前に内線では敗北を繰り返し、2ヶ月もたたないうちに根拠地中心の周老嘴、瞿家湾を相次いで敵に占領され、大勢は決した。多大な犠牲を出した後、10月上旬、夏曦は第七師と地方幹部を率いて洪湖ソ区を脱出、洪湖根拠地はあっけなく崩壊した。

一方、紅八師、九師を率いて外線に転じた賀龍らも敵の追撃と阻止に遭い、襄河を渡れず、荊門、当陽地区より大洪山地一帯に転戦し、後から包囲を突破してきた夏曦、王炳南部と合流した。当時、湘鄂辺ソビエト区、鄂北（襄陽宜）ソビエト区、鄂西北（房県）ソビエト区、巴興帰ソビエト区が夏曦の命じた極左路線の執行と各地区からの紅軍主力の撤収により、支え切れなくなり相次いで崩壊していた。洪湖地区南方の洞庭湖特区も洪湖ソ

ビエト区より残った部隊を率いて移動した崔琪（湘鄂西ソビエト政府主席）が間もなく死亡、33年8月には残っていた遊撃隊が掃討され、最終的に失敗を告げた。

この湘鄂西ソビエト区、特に洪湖ソビエト区崩壊は、5月以後始まった夏曦の肅清が直接の要因になっている。肅清は実に第四次圍剿戦が始まってからも執拗に続けられ、大いに紅軍兵士と根拠地人民の戦意を挫き、戦力を大幅に後退させてしまった。それでもなお夏曦は肅清の勝利について語り、肅清は恐怖を引き起こさず、広汎な大衆の革命的積極性を引き出し、且つ党を健全化し、ソビエトと紅軍を強大なものにしつつあると嘘吹いていた⁽²⁴⁾。その外、夏曦の到来以後の極左路線がもたらした赤区と白区の大衆間の対立の激化もソビエト区の敵に対する抵抗力を弱めていた。中央分局は31年夏の長江の水害により被災した大衆を白区に行かせ、地主や資産家の食糧を奪わせるという難民対策を採った。被災民は白区に避難した地主、富農ばかりか一般農民の食糧や財産まで掠奪してしまい、赤白大衆の対立は激化し、国民党軍の包圍網の完成を容易にした点も看過できない。

さらにこの夏曦の肅清にはずみをつけさせたのは党中央の支持であった。党中央の8月の書簡では、「湘鄂西の肅清工作のなかで執行されている路線は全般的正しく、偉大な勝利を収めており」、しかもそれは「湘鄂西ソビエト区のいっそうの発展と強化の最も有力な保障であり」、「湘鄂西党に対して、より順調にコミンテルンと中央路線を大衆の中に深めていく都合の良い条件を作っている」⁽²⁵⁾と持ち上げ、肅清にブレーキをかけるところか、逆に激励することになった。洪湖ソビエト区の喪失という極めて大きな代価を払ったにも拘らず、肅清はその後も際限なく続けられた⁽²⁶⁾。

〔注〕

(1) 楊秀山「沈痛的教訓——回憶湘鄂西革命根拠地和紅軍的肅反擴大化」『鮮血殷紅』, 1986年,

197頁。

(2) 天漢県とは、『湘鄂西蘇区歴史簡編』196頁によれば漢川の襄北、天門の東の地域とある。だが、匡鏡秋「湘鄂西革命根拠地肅反的一些情況」『常德師專學報』1982年52頁には、張錫侯は天門、漢陽県の紅軍、地方部隊と遊撃隊の幾人かと結託し云々とあり、天門県と漢陽県の組み合わせの可能性もある。

(3) 楊秋山前掲書及び『湘鄂西蘇区歴史簡編』196頁。

(4) 「湘鄂西夏曦報告」（1932年7月8日）『湘鄂西蘇区歴史簡編』197頁より。彼らが如何に常軌を逸して肅清にのめり込んでいたのかを示す資料として、夏曦が抜擢した省委書記楊光華の中央への報告にすぎるものはないと思われる。

「湘鄂西省委書記楊光華給中央的報告」, 楊秋山前掲書, 206—7頁。

(5)(8)(9)(10)(25) 匡鏡秋前掲文。

(6)(7) 楊秋山前掲書, 205頁。

(11)(13)(14)(15) 括弧の中は匡鏡秋前掲文52頁による。

(12) 吳定邦, 林霽「毛簡青」『中共党史人物伝』第六卷。

(16) 張昆弟, 柳直荀については、武田泰淳, 竹内実『毛沢東 詩と人生』参照。

(17) 『湘鄂西蘇区歴史簡編』198頁, 注2。

(18)(20)(22) 賀龍前掲回想21, 26, 23頁。

(19) 蹇先任前掲文, 47—53頁。

(21) 『湘鄂西蘇区歴史簡編』198頁, 注1。

(23) 『湘鄂西蘇区歴史簡編』213頁。四度の肅清で3千人以上を逮捕したとある。

(24) 楊秋山前掲書, 203—4頁。

(26) 「中央給湘鄂西分局省委的指示信」（1932年8月5日）, 匡鏡秋前掲文53頁。

(27) 夏曦は「由於敵人進攻太快, 洪湖蘇区還有許多改組派來不及肅清, 太可惜了!」とまで語っていた。楊秋山前掲書, 207頁。